
ピンポン！

悠里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピンポン！

【Nコード】

N0049S

【作者名】

悠里

【あらすじ】

中学の同級生に誘われて見学に行ったクイズ大会。

そこで甘木慶介は、‘競技クイズ’を目にする。

クイズに心を奪われた慶介は取り立てて進学校でもない自分の高校にクイズ研究会を作ること決心する……！

問題0、クイズとの出会い（前書き）

この小説は作者にとって初めての連載形式を取る作品となります。
テーマとなっている‘競技クイズ’は作者の実際の趣味で進学校で
もない自分の高校にクイズ研究会を作るのも実話だったりしますw
クイズを少なからずやっているという身として出来る限りリアルな
クイズを描けたらいいなあ……とか思ってますw

読んでいたら自然に雑学がついてクイズにも興味を持てる、そんな
作品になることを祈りますw
それではお楽しみ下さい。

問題0、クイズとの出会い

「問題。何故山に」

全員が一斉にボタンを押した。そのうちの一人のボタンのライトが光る。

「ジョージ・マロリー!!」

正解を示す音が鳴り響き軽く会場がざわめく。しかしまた問題、という声がかかると一斉に会場は沈黙に包まれる。中学の時の友達に誘われて見学に行ったクイズの大会。今までクイズと言えばテレビ番組でタレントのやっているもの。そんなイメージしかなかった俺、甘木慶介にとってこれが初めての、‘競技クイズ’との出会いだった。高校一年の、五月のことだった。

問題0、クイズとの出会い（後書き）

連載ですが更新は遅いと思います。

気長にお待ちいただければ幸いです。

とりあえずは読んで下さりありがとうございます！！

問題1. 芦田玲との出会い

「それでこないだクイズの大会を見に行ってきたんだよ」

高校に入り隣の席になった友人、稲木修いなぎしゅうにこないだ見たクイズ大会での話をする。

「へー……で、どうだったの？ クイズっていうとテレビで芸能人がやってるイメージしかないけど」

確かに俺も実際に見てみるまではそんなイメージしか持っていなかった。しかし俺がみたクイズはそんなものとは違った。あれはもはやクイズなんて生ぬるいものではない気がする。あれは戦いだ。

「すごかったよ。なんであるタイミングで分かるのか分からない。問題自体は俺でも分かるのもあったけど俺にあんなことは出来ないよ」

「ふーん……まあ進学校でもない学校の奴には縁のない話だよな」

「そんなことない！」

突然、後ろの方から綺麗な声が響いた。後ろを見るとその声を発していたのは芦田玲あしたれいだった。あまり喋らない女子生徒。しかし入学当初から容姿で目立ち早くもファンクラブが出来ているほどだった。彼女についたあだ名は沈黙の妖精。そんな彼女が突然大きな声を出したものだからクラスは沈黙に包まれクラス中の視線が彼女に集まった。彼女はその視線に気付いたようで顔を真っ赤にして俺の前に歩みよってきた。「ちょっときて」

そういつて彼女は俺の腕を半ば強引に引っ張る。クラスメイトは哑然として見守るだけだ。

「あなたもきて！」

「は、はい！」

俺だけではなく修も一緒に連行された。一安心と同時に少し残念な気もした。妖精と二人つきり、というわけではなくなくなってしまったし。

そして俺と修が連れてこられたのは学校の図書室だった。一時間目が始まる前。昼休みになれば多少は賑わう図書室もこの時間は誰もいない。

図書室に入ってドアを閉めるとやっと彼女は俺の腕を離す。そして突然頭を下げた。

「突然ごめんなさい。でも誤解だけは解いておきたくて」

「誤解？ 何のことだ？」

修が彼女に尋ねる。彼女は頭を上げて俺たちに言った。

「クイズは難しい話じゃない。頭の良さなんて関係ない。それだけは言っておきたいの」

俺は彼女に尋ねた。

「もしかして、芦田さんは‘クイズ’やってるの？」

「うん。まだまだ初心者ではあるけど」

そして一息入れて芦田さんは意地悪そうな笑みで言った。

「もしよかったら二人とも今週の日曜日に私の参加してるクイズサークルの例会にゲストとして参加してみない？」

修が返事をする。

「ごめん、今週は彼女と約束があるんだ」

そういえば修には他クラスに彼女がいるらしい。羨ましい話だ。

「そう、彼女と一緒に参加してもらっても構わないんだけど別に強制はしないわ。甘木君はどう？」

俺はその問いに思わず答えた。

「どうせ暇だからいいよ」

暇だから、と最初に付け加えたのは本心ではない。クイズに興味を持っていたのは確かだしちょっとしたアイドルと言えなくもない彼女と休日を過ごせるのは思ってもないお誘いだった。

「ホントに！？ ありがとう！ じゃあ日曜日の12時に駅で待ち合わせ！ 約束だからね！」

返事をした瞬間沈黙の妖精とは思えないくらいの声の大きさととびつきりの笑顔で彼女は言って図書室を出て行った。

隣では修があいつあんなキャラだったのか……と呟いている。俺だってびっくりだ。もの静かで、近寄りがたいと思っていたクラスメイトがあんなに嬉しそうに話すのだ。きっとクイズが大好きなんだろう。クイズに興味を持ったのが俺でなくてもあいつはきっとあんな笑顔を見せるんだろうなあ……とか思ったら何故か少しだけ寂しいような、そんな気がした。

そしてその週二度と芦田とは喋ることもなく、週末を少しだけ楽しみにしながらその週は終わりを告げた。それが俺と、クイズと俺を繋いだ芦田玲との出会いだった。

問題2. クイズとの出会い・前編

そして待ちに待った日曜日がやってきた。だが何を着ていけばいいのかも何を持っていけばいいのかも分からない。もちろん芦田のメーラドレスなど知るわけもない。とりあえず当たり障りのないであろう制服を着て待ち合わせ場所である駅に向かった。とりあえず持ったのは携帯と財布、それから筆記用具だけである。

現在の時間は8時40分。駅までは10分ほどだし余裕で間に合うだろう。案の定待ち合わせ時間の10分前には待ち合わせ場所についた。まだ芦田はいない。携帯を弄りながら芦田を待つ。それから5分ほどして突然肩をつつかれた。

「ごめん、待った？」

芦田は涼しそうな白のワンピース。普通に私服だった。それを見て思わず本音が漏れる。

「かわいい……」

「へ？」

芦田は言葉の意味に気付いたようで顔を真っ赤にして否定する。

「そ、そんなことないよ！　っていうかお世辞はいいから早く行こう！」

お世辞じゃないんだけどな……照れてる姿もかわいい。

切符を買い電車に乗る。それにしてもなんかデートみたいだな。言ったら芦田はまた顔を真っ赤にして怒るんだろうか。

「ところで甘木君は制服なんだね」

「だって芦田さん着るものについては何も言ってなかったから何着ていけばいいか分からなかったし」

芦田は笑いながら言う。

「あ、ごめんごめん。言うの忘れてたよ。あ、あと私のことは芦田さん、じゃなくて玲でいいよ」

玲って……正直女子をファーストネームで呼ぶのはかなり照れるの

だが何だか慣れてないと思われなくなかった。

「えっと……じゃあ俺のことも慶介でいいよ、玲」

「了解！　ところで慶介は中学の友達に誘われてクイズの大会を見に行ったんだよね？」

「ああ。先週末にあった大会を」

「先週末の大会は私エントリーが間に合わなかったんだよねえ……その友達って高校はどこなの？」

その友人、篠木悠介はの通っている学校は浅香学院地域でも有数の進学校である。じっさい悠介は学年でもトップレベルの学力だった。それを玲に伝えるとなるほどね……と少しだけ考え込む。

「浅香学院ではこの辺では唯一クイズ研究会がある学校だからね。実際かなり強いよ。まあ今日のサークルに参加してる人はいないけど」

「ところでそのサークルっていうのはなんなの？」

「ああ、説明してなかったね。サークルっていうのは社会人とか、私みたいにクイズ研究会のない学校の人が参加して月に一回くらい集まってクイズをするの。まあ日によっていろんな人が参加するけどね。普通に学校の部活に参加してる人も出るし。今日もしかしたら浅香の生徒もいるかもしれないしね」

「ってことは分ってはいたけど知らない人とか年上の人とかがいっぱいいるんだな……」

そう思うと正直かなり緊張する。学生には年上と交流する機会なんてそんなにないし。

「そうだね。私も知らない人もよく参加してるし。だいたいメンバーは一緒だけど年齢は本当に様々だよ。下は中学生から社会人まで。うちのサークルはそんなに大きくもないし毎回参加者は10人ちょっとだけだね。大きいサークルなら30人近く参加することもあるし。でも小さいサークルの利点っていうのはボタンがたくせん押せるところにあるから。まあクイズっていうのはたくさんの人と交流出来るのも楽しいところだからね。慶介も今日は楽しむといい

よ」

そんなことを言っている間に電車は目的地に着く。玲の話によれば駅から5分ほどの市民センターで活動は行うらしい。場所を借りるお金はみんなで分け合って出すのだが初参加からは取らないという。俺はここでクイズというものを知る。そしてその魅力に取り付かれてしまうとは。この時はまだ気付く余地もなかった。もしかしたら玲には少なからず分かっていたのかもしれないが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0049s/>

ピンポン！

2011年3月30日19時14分発行